



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報

2011年11月30日



AJEL

No.106

1. 理事会報告
2. 第33回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ
3. 研究部会開催案内
4. 寄稿：「FIEALC 第15回研究大会参加報告」（若手支援制度採用第1号）
5. 寄稿：「地域研究コンソーシアム（JCAS）2011年度年次集会参加報告」
6. 新刊書紹介
7. 事務局から

1. 理事会報告

○第134回理事会議事録

日 時：2011年10月23日（日）

11：00～13：30

場 所：上智大学2号館10階

2-1015a 会議室

出席者：狐崎（理事長）、石橋（書記）、新木、受田、牛田、浦部、岸川、小池、高橋、西島、堀坂

欠席者：落合

< 報告事項 >

(1) 年報編集（小池理事）

- ・第32号の原稿募集を10月7日に締め切った。投稿数5本（院生4、所属不明1）。本数が少ないので11月18日締め切りで

再募集を行なった（その結果、当初の投稿分を含めて合計18本の投稿があった）。

- ・すでに投稿している会員には改稿を認める。追加募集に応募する会員に対しては評価上のハンディキャップが生じないように公平性を確保する。

以上の小池報告を受けて、年報投稿の活性化に関する意見交換が行なわれ、次回の理事会において総会に向けた諸提案を集約することで合意した。

(2) 会報（新木理事）

- ・第105号を7月29日に刊行した。
- ・第106号は11月末刊行に向けて準備中。若手支援制度の採用第1号となる八木百合子会員によるFIEALC研究大会参加報告も掲載予定。

(3) 会計（堀坂理事）

- ・予算執行状況について報告。

(4) HP・学会ニュース（岸川理事）

- ・HPのアップデート進捗状況を報告。

(5) 研究部会（石橋、牛田、高橋各理事）

- ・次回の東日本研究部会を12月10日（土）に東京外国語大学本郷サテライトキャンパスで開催する。
- ・次回の中部日本研究部会を12月17日（土）に南山大学名古屋キャンパスで開催する。
- ・次回の西日本研究部会を2012年1月22日（日）に関西学院大学大阪梅田キャンパス（K.G.ハブスクエア大阪）でイベリア・ラテンアメリカ文化研究会（CECILA）と共同開催する。

(6) 日本学術会議・国際交流（浦部理事）

- ・八木百合子会員が若手支援制度の助成を

受けて FIEALC 研究大会で報告した。

- ・地域研究コンソーシアム (JCAS) 2011 年度年次集会 (11 月 5 日、大阪大学豊中キャンパス) への参加を要請されている。先方から旅費が支給される。現地交通費と滞在費は当学会から支給できるが、先方より支給があればそちらを活用する。
 - ・地域研究学会連絡協議会 (JCASA) 総会 (11 月 26 日、法政大学市ヶ谷キャンパス) には浦部理事は都合がつかず欠席。堀坂理事が代理出席する。
- (7) 事務局 (受田理事)
- ・入会希望 7 件、退会希望 7 件があった。
 - ・7 月上旬、東日本大震災に被災した会員の自己申告により年会費を免除する措置に対して、1 件の申請があり、承認した。
 - ・8 月末、IEP (ペルー問題研究所) に年報バックナンバーを寄贈した。
 - ・年報バックナンバーの欠損号を購入したいとの要望があるので、保管分を確保したうえで販売したい。

< 審議事項 >

(1) 第 33 回定期大会について

- ・大会実行委員会の発足が承認された。大会実行委員長を田中高 (中部大学)、実行委員を牛田千鶴 (南山大学)、田中京子 (名古屋大学)、中川智彦 (中京学院大学)、杓谷茂樹 (中部大学)、大谷かがり (中部大学)、金澤雅子 (中部大学・院生) の各委員に委嘱すること、シンポジウムのタイトルを「これからのキューバの行方」(仮題) とすること、記念講演とシンポジウムにキューバから 2 名のゲストを招聘することがそれぞれ了承された。
- ・上記キューバ人 2 名の招聘にかかる費用支出に関して審議の結果、開催校の経費を超える額については、企画費及び予備

費から充当することが承認された。

(2) 次期理事会選挙の選挙管理委員会

- ・次期選挙管理委員会の選出については、6 名の会員への委嘱が行なわれることで合意した (注: 理事会議事録への追記として同委員リストを後掲)。

(3) シニア会員制度の導入に関わる会則の変更

- ・会則変更案について合意し、会則変更手続きに則り、次回総会に提案することで合意した。

(4) 在外研究に伴う学生会員の休会制度

- ・学籍を有する正会員を対象に、1 年を超える海外での調査を行なう場合、1 年以上 2 年まで会費を免除する制度の導入について先の総会で合意されたが、会員資格については選挙権及び被選挙権を除くすべての資格を維持する旨、会則の付則事項に明記し、これを次回の総会に提案することで合意した。

(5) 地域研究部会の活性化と支援制度

- ・浦部理事からの提案に基づき審議がなされた。
- ・地域研究部会で発表する常勤職に就いていない会員に対する旅費の補助については、一律 5000 円 (2 年に 1 回) にしたかどうかの案や、研究部会の開催方法等について意見交換がなされ、条件を明確にしつつ会員の発表をできる限り支援していく方針が確認された。また、定期大会への参加助成についても検討すべきとの意見も出された。
- ・本件については次回理事会で継続審議することになった。

(6) 年報掲載論文の HP での掲載

- ・理事長からの提案に基づき審議がなされた。
- ・HP 掲載については、論文執筆者の同意書をとること、その点を原稿募集の応募要項に記載すること等について意見が出

された。

- ・公開時期については、刊行からできる限り早期のHP公開が望ましいが、技術的対応や内容確認、盗作防止への配慮も要するため、半年の準備期間を置いて12月1日からの掲載が適切ではないかとの意見が出された。
- ・本件については次回理事会でも継続審議し、次回総会で提案することで合意した。

(7) 入退会の承認

- ・入会希望者7名、退会希望者7名が承認された。
- #### (8) 学会関連資料の専用スペースでの保管
- ・事務局他で保管する学会関連資料（とくに年報等のバックナンバー）の保管問題について受田理事から提案がなされ、専用スペースとしてトランクルームを利用することが了承された。見積りをもって業者を選定することになった。
 - ・会報についてはデジタル化したうえでHPに掲載し、2部保管のルールを遵守しつつ残部は廃棄処分することになった。
 - ・年報については、処分・保存の原則を受田理事が提案にまとめ、次回理事会で継続審議することになった。

(9) 次回理事会は2012年2月に開催予定（日時と場所は今後決定）。

（文責：狐崎）

（追記）

<次期理事選挙の選挙管理委員会委員の委嘱>
第134回理事会において、以下の会員に次期理事選挙にかかわる選挙管理委員会委員を委嘱することが了承され、2011年10月30日、理事長より委嘱された。

上谷直克（アジア経済研究所）、大久保教宏（慶應義塾大学）、北野浩一（アジア経済研究所）、杓谷茂樹（中部大学）、高安健一（獨協大学）、横山和加子（慶應義塾大学）

（以上50音順）

2. 第33回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ

第33回定期大会は、2012年6月2日（土）、3日（日）の両日にわたり、中部大学春日井キャンパス（愛知県春日井市松本町1200）で開催されます。研究報告をご希望の方は、2012年1月31日（火）までに、氏名、所属、報告の標題を明記し、また分科会編成の際に考慮してほしい地域ないし分野があればそれも併記して、下記の連絡先までお申込みください。パネルを希望する場合は、代表者および報告者の氏名、所属、パネルの標題を明記してお申込みください（各報告者の標題は、併記されることが望ましい）。また申し込みをされる方は2012年4月20日（金）必着で600字程度の報告要旨もしくはパネルの趣旨説明をお送りください。できるだけEメールをご利用ください。

また託児を希望される方も4月20日までに、お子さんの年齢と人数を下記にご連絡ください。ある程度の人数に達せば、民間の業者に委託することも検討しています。なお有料となります。

（連絡先） takasi.chubu@gmail.com

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

中部大学国際関係学部

田中高 研究室気付

日本ラテンアメリカ学会

第33回大会実行委員会

（Eメールは件名を「定期大会報告希望（氏名）」と、郵便の場合は封筒に「定期大会希望」と朱書きしてください）

なお定期大会の分科会では、可能な限りディスカッサントを選定し、事前に報告ペーパーをディスカッサントに送付するよう報告者をお願いいたします。さらに定期大会報告では、事前に報告ペーパーを用意

するよう理事会より報告者に推奨されていますので、可能な限りそれらを学会 HP に大会前に掲載できるよう、原稿を HP 担当の岸川理事 (t-kishik@sophia.ac.jp) 宛に送ってください。

(これらの措置は、次期定期大会においては、あくまで試行的なものであり、義務ではありませんが、以上の準備をしていただくことによって、『年報』等に論文として掲載できる内容のある報告にさせていただくようご配慮をお願いいたします)

3. 研究部会開催案内

下記のように各研究部会の研究会が開催されます。皆様、ふるってご参加ください。

《東日本部会》

日 時：2011 年 12 月 10 日 (土)
13:00 ~ 18:00

会 場：東京外国語大学本郷サテライト 7 階
発表者・発表題目 (※各発表者の所属は申し込み時点)：

1. 高橋亮太 (筑波大学大学院博士後期課程)
「ブラジル・ルーラ政権 (2003 ~ 2010 年) の外交政策—先行研究の紹介および評価—」
2. 吉田貴弘 (東京農業大学大学院)
「パラグアイにおける大豆生産の実態と対日輸出拡大の可能性」(仮題)

連絡先：石橋 純 (東京大学)
isibasi@ask.c.u-tokyo.ac.jp
柳原孝敦 (東京外国語大学)
yanataka@tufs.ac.jp
ロメロ・イサミ (早稲田大学)
isami.romero@aoni.waseda.jp

《中部日本部会》

日 時：2011 年 12 月 17 日 (土)
14:30 ~ 17:30
会 場：南山大学名古屋キャンパス
L 棟 9 階 910 会議室

発表者・発表題目：

1. 渡部森哉 (南山大学)
「古代アンデスのワリ国家における地方支配—エル・パラシオ遺跡の発掘調査より—」
 2. その他
すべての報告者と題目が確定次第、学会ニュースおよびホームページでご案内いたします。
- 連絡先：西村秀人 (名古屋大学)
fzk05024@nifty.com
牛田千鶴 (南山大学)
ushidac@nanzan-u.ac.jp

《西日本部会》

日 時：2012 年 1 月 22 日 (日)
13:00 ~ 17:00
会 場：関西学院大学大阪梅田キャンパス
(K.G. ハブスクエア大阪)
14 階 1407 号室
(10 階の受付を通らず、直接教室へお越しください)

http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/access/index.html

今回の部会は、イベロ・ラテンアメリカ文化研究会 (SECILA) との共同開催になります。皆様のご参加をお待ちしております。
発表者・発表題目 (※各発表者の所属は申し込み時点)：

1. 山内熱人 (京都大学大学院博士後期課程)
「生業、消費生活の貨幣経済化と人々の思い—メキシコ、オアハカ州のサポテコ人村落の事例から—」(仮題)
2. 塚本美穂 (福岡女子大学大学院博士後期課程)
「アナ・カステイリヨの『ザ・ガーティアンズ』における宗教性」
3. 禪野美帆 (関西学院大学)・井上幸孝 (専修大学)
「市街地となった旧先住民村落の居住者

ーメキシコ市、サン・ヘロニモ・リディセ地区の事例一]

連絡先：高橋百合子（神戸大学）

ytakahashi@people.kobe-u.ac.jp

禪野美帆（関西学院大学）

mzennoj@yahoocoo.jp

宮地隆廣（同志社大学）

tmiyachi@mail.doshisha.ac.jp

4. 寄稿：「FIEALC 第 15 回 研究大会参加報告」（若手支援制度採用第 1 号）

八木百合子（国立民族学博物館外来研究員）

2011 年 7 月 11 日から 13 日にかけて FIEALC（ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟）の第 15 回研究大会が、スペインのバレンシア工科大学（Universidad Politécnica de Valencia）で開かれた。「ラテンアメリカ、グローバル化と統合」というメインテーマのもと開催された今大会には、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アジアなどから 350 名を超えるラテンアメリカ研究者が集い、日本からも 10 名の研究者が参加した。大会初日には、パリ第 3 大学のフェルナンド・アインサ教授によって「グローバル化をこえて：ラテンアメリカの第二のムンディアリゼーションに向けて」と題する記念講演が行われた。

50 件近くあった分科会のテーマは、国際関係／人権問題／マイノリティの文化戦略と抵抗／地域間経済連携協定／国民国家形成／教育／科学技術／アイデンティティ／文化遺産／水資源管理／環境問題／職業倫理／労働問題／移民／知識と情報流通、など多岐にわたったが、それらの主題をグローバル化との関係から捉える発表が目立った。また、2009 年の前大会から今大会に至るあいだに、メキシコ、アルゼンチン、パラグアイ、ベネズエラなどの国々

が、独立を宣言してから 200 年の節目を迎え、それを記念する祝賀行事が行われたこともあり、「独立 200 周年」というラテンアメリカの時節に即した話題に触れた発表もみられた。なかでも、各国で催された記念日に関するディスカッションを比較分析した報告は、ラテンアメリカ諸国の記憶の政治に関して重要な示唆を与えるものだったといえよう。

報告者は、「ラテンアメリカにおける国民国家形成：アイデンティティをめぐる諸問題」というテーマの分科会に参加し、「近代ペルーにおける国家イメージの創出－守護聖人サンタ・ロサの聖地建設をめぐる－」と題する発表を行った。本発表では、国家の守護聖人という象徴的な人物に捧げられた聖地の建設事業を事例に、この建設をめぐる多様な主体の実践と交渉過程を描き出すことで、ペルーの国家イメージがさまざまなアクターの複雑な絡み合いのなかで創出されてきた点を提示した。

会期中には、研究報告や講演以外にも多彩なイベントが行われ、キャンパス内で連夜催された演奏会や舞踊公演が、夏のバレンシアの長い一日を締めくくった。

なお、最終日に開かれた総会では、次期大会（2013）の主催校にトルコ共和国のアンカラ大学が選ばれた。ただし、会場は首都アンカラではなく、地中海に面した南部の街アンタルヤが選定され、大学所有のホテルを貸し切って開催することが決定した。あわせて、2015 年の大会は韓国の釜山外国語大学が招致している。また、総会では、FIEALC の第 11 代会長を務められ、本年 4 月に逝去された山田陸男会員の生前の功績に敬意を表し、出席者全員によって黙祷が捧げられた。

最後になったが、今回の研究大会への参加は、日本ラテンアメリカ学会若手支援制度ならびに公益信託瀧澤民族学振興基金の

助成により可能になった。記して心より感謝を申し上げます。

5. 寄稿：「地域研究コンソーシアム（JCAS）2011年度年次集会参加報告」

浦部浩之（獨協大学）

11月5日（土）10：00～12：00、本学会の加盟している地域研究コンソーシアム（JCAS）の年次集会（総会）が大阪大学豊中キャンパスで開催され、担当理事として出席してきたので、いくつかの点を以下にご報告しておきたい。またJCASはこの年次集会に合わせて毎年11月初旬、「コンソーシアム・ウィーク」を開催し、様々な研究報告や討論の場を設けているが、本年度も4日（金）から6日（日）までの3日間にわたり、同キャンパスにて2件の公開シンポジウム（「地域研究のだまし絵—『グローバル化』後に『地域』への眼差しを再考する」、「『情報災害』からの復興—地域の専門家は震災にどう対応するか」）や地域研究次世代ワークショップなどが開催された。時間の都合で2日目のみの参加となったが、年次集会に引き続いて開催（13：00～18：00）されたシンポジウム『「情報災害」からの復興』に出席する機会を得たので、それについても報告する。

最初にJCASの概要をご紹介しておきたい。JCASは個別地域を対象になされてきた地域研究を、地域の枠組みを超えてネットワーク化し、単体の組織では実現困難な課題に共同して取り組むことを目的として、2004年4月に結成された。現在、これに加盟しているのは「研究組織」（大学の研究所やセンターなど）、「教育組織」（大学の研究科など）、「学会」、「研究プロジェクト」（グローバルCOEなど）、「社会組織」（市民団体やNGOなど）など計93組織に

のぼる。共同研究の推進をはじめ、社会との連携の強化、研究交流の促進、次世代研究者の支援、活動内容の発信などの様々な活動が、JCAS本体や加盟組織間の連携によって行われている。JCASが編集し、事務局のある京都大学地域研究統合情報センターが発行している定期刊行学術誌『地域研究』は、会員の間でもよく知られていることと思う。

今年は日本でも3月11日に未曾有の震災が発生し、JCASの様々な役割の中でもとりわけ社会との連携や研究成果の社会への還元の可能性がいっそう強く認識され、地域研究の役割や存在意義についても再考を促された。5日に開催されたシンポジウムはそうした問題認識が強く反映されたものであり、各報告者からは、東日本大震災における加盟組織の活動、その他の災害現場での活動、自然災害や人為的な災害（戦災など）と地域研究の関わりに関する考察などが具体的、かつある種の迫力をもって報告された。残念ながらその内容をここで逐一記すことはできないが、一出席者としての感想を述べれば、研究対象であると同時にその成果を還元すべき「地域」において地域研究者の果たしうる役割はきわめて大きいこと、しかし同時に、実践的活動の現場においては自らの行動がもたらすインパクトについての自覚と責任が必要であることを、あらためて考えさせられた。そこには、研究者は「地域」において主体的な関与者となるべきなのか、それとも観察者に徹すべきなのか（もしくは、しよせん観察者に留まることしかできないのか）という選択や葛藤の問題が内在しているが、今回の大震災では被災がより身近なものであっただけに、研究者としての自己の立場や役割の再確認を強く求められたと言えそうである。いずれにしても、研究対象地域を相対化する客観的な研究であれ、研究者

による社会連携の試みであれ、まずは研究や経験を蓄積すること、そしてそれらを知の集合体としてより意識的かつ組織的に体系化していくことが、非常に大切だと思われる。地域を横断した地域研究者の間の相互啓発と共同作業が求められるゆえんである。

ところで本年度より、JCASは地域研究コンソーシアム賞を設けており、年次集会ではその発表と表彰が行われた。第1回（2011年度）の受賞者は、「研究作品賞」が堀江典生編『現代中央アジア・ロシア移民論』（ミネルヴァ書房）、「登竜賞」（対象は大学院生および最終学歴修了後10年程度以内を目安とする研究者）が王柳蘭『越境を生きる雲南系ムスリム—北タイにおける共生とネットワーク』（昭和堂）、「社会連携賞」が石井正子『『緊急人道支援と地域研究の人材交流支援』活動』であった。この賞は、個人による自薦・他薦により選考対象とされ、その応募の期限は毎年5月上旬とされることになっている。JCASからは各加盟組織に対し、優れた作品・活動を積極的に推薦することを周知するよう、強く求められた。ラテンアメリカ地域研究の成果を社会に発信することにもつながるので、本学会の会員各位にもぜひ推薦へのご協力をお願いしたい。

また、JCASでは、様々なテーマによる研究、複数の加盟組織が行う共同研究への助成事業を行っている。当然、当学会もそれへの応募資格を有する。理事会としてもこれに関与することによって積極的であるべきと感じているが、その前提には、会員による具体的な研究課題の設定や他の加盟組織との共同研究体制の構築などが必要である。ぜひ魅力ある研究課題や研究活動を組織し、応募することをお願いしたい。また当学会が主体となって応募すべき企画に関してのご提案などがあれば、それ

を理事会にお寄せ頂きたい。なお、応募要領等については、JCASより学会宛に案内がある場合は適宜適切にメールニュースでも配信したいが、応募期間が短い場合などもあるので、JCASホームページ (<http://www.jcas.jp/>) にも注意を払って頂ければ幸いである。

JCASにおいて、ラテンアメリカ地域研究に関しては、京都大学地域研究統合情報センターと京都外国語大学ラテンアメリカ研究所の2組織が、幹事組織（全12組織で構成）としてその運営に中心的な役割を担っている。だが、研究活動や社会連携の面で、JCASにおけるラテンアメリカ地域研究のプレゼンスは他の地域研究（とりわけアジア地域研究）に比べるとかなり低いのが実情である。過去1年の間に実施された34件の企画のうち、ラテンアメリカを直接的なテーマとしたものは、共同企画研究で「シンポジウム：メキシコの歴史と現在を考える」（京都外国語大学）、地域研究次世代ワークショップで「来るべき『ブラジル研究』にむけて—政治経済の変化がもたらすもの—」（企画責任者：高橋慶介氏）の2件にすぎなかった。理事会としての反省も込めて言えば、ラテンアメリカ地域研究の成果をより社会に広く発信する意味でも、会員各位に対し、JCASへのより積極的な参画を呼びかけたい。

6. 新刊書紹介

木村榮一『ラテンアメリカ十大小説』
岩波新書、2011年2月刊、192頁（紹介者：柳原孝敦 東京外国語大学）

授業でも執筆でも、「概論」というのがいちばん難しい、とは私たちの世界ではよくいわれること。文学の分野に話を絞るなら、文学史がそれに当たるか？ 膨大な読書量を前提とするから、生半かな若い者が自信をもってやるなど、とてもできたものではない。

木村榮一『ラテンアメリカ十大小説』は文学史ではない。けれども、ボルヘス、アストゥリアス、カルペンティエル、コルタサル、ドノソ、ガルシア＝マルケス、フエンテス、バルガス＝リョサ、プイグ、アジェンデの十人の代表作を、その代表作のみならず、作家の人生や、その他の作品の概要などまで添えて紹介しているのだから、これはもうほとんど文学史だ。アストゥリアスを除く全員の翻訳一作以上に携わり、解説も書いている著者であればこその一冊だ。

かといって、いわゆる文学史のマニュアルのように時代と潮流・思潮などの概説にいたずらにページを割いているわけではない。取り上げられる作品はフエンテスの『我らが大地』を除けば翻訳の存在するものばかりで、あくまでも日本の読者に向けて書かれた作家の紹介の書である。ボルヘスを一冊だけ読んだことはあるのだけど、彼の他の作品のことも知りたい、とか、バルガス＝リョサはだいたい読んだが、ラテンアメリカの他の作家は不案内なので、というような人向けの概説書。もちろん、ゼロから始める人にもお勧め。

誰にでもわかる特徴が本書にはあって、それがおそらく著者のこだわりなのだろうと推察される。各章冒頭に、対象となる作品の一節を掲載していることだ。たとえば『百年の孤独』の場合、ホセ・アルカディオ・

ブエンディアーアが、地球が球体（「オレンジのように丸い」）であることに気づくエピソードが二ページにわたって引用されている。ここで取り上げられる小説は、どれも魅力的な作品ばかりなのだから、その作品の一節を読むのが、その魅力に触れる最良の手段だということなのだろう。その一節というのは、おそらく、著者が考える作品中の最良の一節。最良の中の最良に触れるというわけだ。

引用が終わったところから始まる本文も、小説に負けてはいない。木村榮一の本領発揮だ。「以前、メキシコで一年ほど暮らした時に、友人に誘われて観光地として知られるポボカテペトル山までドライブしたことがあります」と始まる文章が、カルペンティエルの話にどのように繋がるというのか？ 翻訳のあとがきなどで、私たちとしてもすっかり馴染んだ木村節とは、あたかも落語の「まくら」のように、一見無関係と思われるエピソードから語り起こし、それを本題へと繋げていくその展開の妙のことだ。本題に入ってから、これでもかとはばかりに、作品の執筆や作家同士の関係にまつわるエピソードを惜しげもなく披露してサービス精神に溢れている。読者はこの木村榮一の語りをも堪能することになるという仕組み。

そんなわけで、これはただ木村榮一という希有なストーリーテラーのみが書き得た作品でもある。だから、当「会報」の読者である若い文学研究の徒には、勉強のためにはこれを読み、ただし、これを目指してはいけない、と言っておきたい。ここにいたるには地道な研鑽が必要なのだ。道は長い。

メソアメリカ考古学に興味を持つ者でなくとも、別名オルメカヘッドと呼ばれる巨石人頭像の写真はどこかで見たことがあるだろう。本書の表紙の写真もまさにこの巨石人頭像である。この一般的なイメージとともに常に語られてきた初期文明オルメカは、メソアメリカ高文明地帯における考古学の教科書などでは「母なる文明」として必ず紹介される。だが、そのいずれもがオルメカ文明を詳細に記述したものとは言いがたく、その意味で本書は日本で最初にオルメカ文明に正面から取り組んだものといっているだろう。

著者の伊藤伸幸氏の問題意識は、従来漠然と認識された“美術様式”に基づいて研究されてきたオルメカ文明を、先古典期という編年上の枠組みの中で「オルメカ文明全体の特徴、時期的変遷、地域差等を再考し、同時期の文化や後につながる諸文化・文明を具体的に比較すること」(p.2)によってメソアメリカ文明の中に正しく位置づけることであるといえる。

そのために本書では、オルメカ文明に先行する文化について簡単に眺めたのち（第2章）、オルメカ文明の文化内容を巨大石彫、建造物、農耕、文字、政治組織、ジャガー信仰、交易といった観点からまとめ（第3章）、さらにその中心地であるサン・ロレンソ、エル・マナティ、ラ・ベンタ、トレス・サポテス各遺跡の記述を行った上で、メキシコ中央部とメソアメリカ南東部太平洋側でその影響を強く受けた部分を整理している（第4章）。一方で、これと同時代のメソアメリカ諸文明が、一部オルメカ的な要素を持ちつつも、基本的にはそれぞれ独自の文化を発展させていたことを示しつつ（第5章）、オルメカ文明がその後のメ

ソアメリカ諸文明に与えた影響を、メソアメリカ南東部太平洋側の文化内容の記述を中心に考察している（第6章、第7章）。

伊藤氏は大学院でオルメカ文明を研究して以来、一貫して同文明に関心を持ち続けてきた。彼のその後の経歴は、カミナルフユ、チャルチュアパ、ロス・ナランホスなどの遺跡の調査を行ってきたマヤ学者の側面が強いが、実はこれらの調査地には初期にオルメカの影響が強く見られるという共通点がある。そのせいか本書でもオルメカ文明が初期のマヤ文明に影響を与えている部分が特に強く打ち出されているが、その点は評価が分かれるかもしれない。

そうしたフィールド考古学者としての経験は、自身のオルメカ研究に広い視野を与えている一方で、その研究手法を非常に手堅いものにしてている。その手堅さ故に、一部の読者には本書の記述は面白味に欠けているように映るかもしれない。しかしそれは、理論やモデル化といった、ある意味派手な議論に踊らされることなく、一貫してデータに寄り添い、その確実かつ網羅的な記述に努めるという、地に足が付いた研究姿勢にぶれがないためである。こうした文献は何度も読み返すうちに味わいのようなものが出てくるものだ。

考古学を志す若手学徒には、ぜひ本書における伊藤氏の姿勢から考古学者として大切なことを学びとってもらいたい。また本書の内容をさらに深めたいと思われたら、同氏の博士論文（名古屋大学大学院文学研究科）が『メソアメリカ先古典期文化の研究』（溪水社、2010年）として出版されているので参照されることをお勧めしたい。

名波正晴『検証・チリ鉱山の69日、33人の生還—その深層が問うもの—』
平凡社、2011年8月刊、270頁（紹介者：受田宏之 東京外国語大学）

チリは日本との結び付きの深い国である。地震国であり、1960年に同国で発生した巨大地震による津波は日本にも襲来し、142人も犠牲者を出した。日本に輸入されているチリ産品の1つにサーモンがあるが、古くから津波に苦しみ東日本大震災では甚大な被害を受けたことで知られる宮城県南三陸町は、銀鮭の養殖が盛んな地域であり、その技術はチリに移転され、やがてチリからの輸入養殖サーモンを加工するという展開、交流がみられたのである。また、ラテンアメリカに明るい日本人の間で、チリは、ポピュリズムとは縁の薄い、堅実なイメージで語られる。安定成長と貧困削減を達成したチリ経済は、新自由主義の成功例、南米の優等生と評価される。民政移管以降ずっと続いてきた中道左派政権は、昨年より大富豪のピネラ大統領率いる中道右派政権へと変わったものの、政策面での大きな変更はないだろうと考えられている。

だが、一次産品とその加工品への依存、中小鉱山における劣悪な労働環境、富の集中など、「先進国入り」を目指すチリも、多くの課題を抱えている。新しいところでは、2011年の春より、公立教育の充実等を求めて、学生による激しい抗議行動が各地で起こっている。同国のサンホセ鉱山における事故と救出劇——2010年8月に落盤事故が発生、事故から実に17日後に坑内に残された33人全員の生存が確認され、69日後には彼らはみな特殊カプセル

に乗って救出された——は、世界中で報道されたが、3.11以降、遠い出来事になりつつある。同事件を検証した本書は、チリという国が抱える光と影を浮かびあがらせるとともに、現在の日本もそこから多くを学ぶことができる、という思いのもとに書かれている。

インターネットの時代だからこそ、著者自らが現場を訪れ収集した一次資料——救出された労働者自身へのインタビューは、高額な謝礼の支払いが相場となったため、ごく限定的であるものの——は、文章に説得力と臨場感をもたらしている。扱う内容も広く、事故後の過酷な坑内の様子、坑内外の様々な主体が関与する救出過程はもちろん、事故の背景や陣頭指揮を取る大統領の思惑などが、丁寧に描かれている。極限状況、鉱山労働についての記述に厚みを持たせるため、著者は、1972年の「アンデスの奇跡」（標高4千mの雪原で乗員乗客45名を乗せた飛行機が墜落、うち16名が72日後に救出された）の生存者および日本の元炭鉱労働者に行ったインタビューも、載せている。最後に、人を絶望に追いやることを防ぐ家族の絆、地域ボランティアが担う消防団制度、危機への大統領の迅速な対応やアピール力などは、先行きのみえない日本にも示唆を与えてくれる。出来事自体のドラマ性を超えて、本書には貴重な情報が含まれ、多様な読まれ方を可能にする。多くの人びとに読んで欲しい力作である。

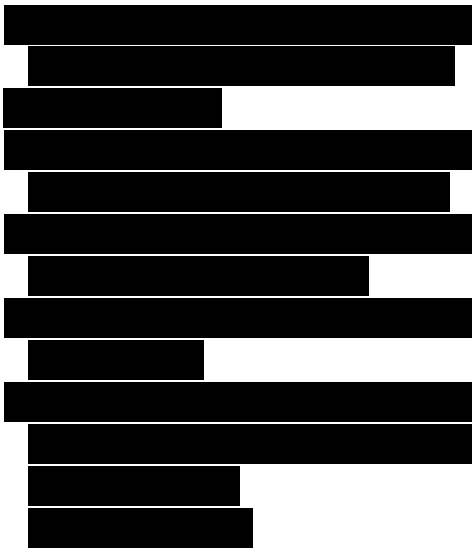
7. 事務局から

- ・所属・住所等に変更が生じた場合は、速やかにその旨、事務局までご連絡ください（会費の払込票に新住所を初めて記載される場合には、念のため「通信欄」にその旨お書き添えくださると助かります）。なお、その際、個人情報保護の観点から、会報掲載への可否を必ず付してご連絡ください。
- ・無届で会費を2年以上納められていない会員に対しては、会員継続の意思確認と支払いの督促を行わせていただきます。ご返事がない場合は、経過措置として1年の猶予期間の後に除名といたします。

I. 会員関係

[Redacted text block]

[Redacted text block]



Ⅱ．会員の仕事など（事務局宛送付分）

- 「人間文化研究機構のあり方の検討状況—経過報告—」人間文化研究機構総合研究推進委員会、2011年5月刊。
- 「人間文化研究機構現代中国地域研究推進事業実績評価報告書」人間文化研究機構地域研究推進委員会、2011年8月刊。
- 「キャリア・パスとしての社会貢献？若手地域研究者の現状と社会連携の可能性」（西芳実編）、地域研究コンソーシアム、2011年8月刊。
- 「地域研究コンソーシアム「地域の地」シンポジウム報告書 中東から変わる世界」（西芳実・山本博之編）、地域研究コンソーシアム、2011年9月刊。
- 『イベロアメリカ研究』（上智大学イベロアメリカ研究所）第XXXIII巻第1号、2011年8月1日刊。
- 『検証・チリ鉱山の69日、33人の生還—その深層が問うもの—』（名波正晴）、平凡社、2011年8月19日刊。
- 『Encontros Lusófonos』（上智大学イベロアメリカ研究所）第13号、2011年10月30日刊。

編集後記

第106号をお届けします。本号には複数の学術情報と新刊紹介文を寄稿いただき、読みごたえのある内容になりました。12月から1月にかけて開催される地域研究部会と6月の次期定期大会の情報も掲載しました。追加情報は学会ニュースやホームページ、次号でお伝えします。

『研究年報』の原稿を再募集したところ本数が増加したと担当理事から報告がありました。理事会では投稿の活性化やインターネット時代の年報のあり方について検討が続いています。会員諸氏からもご提言をお寄せいただければ幸いです。

（新木秀和）

訂正

会報第105号 p.40の「8. 山田陸男元理事長の逝去」における「最期」という表記は「最後」の誤りです。訂正させていただきます。

会費納入のお願い

学会会費を未納の方は、下記の郵便振替口座にご送金願います。会則により、会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。

口座記号番号：00140 - 7 - 482043
加入者名：日本ラテンアメリカ学会

No.1056 2011年11月30日発行

学会事務局

事務局 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学受田研究室気付

TEL 042-330-5252

FAX 042-330-5406

（海外事情研究所方 受田宏之宛）

メール ukeda.gakkai@mbr.nifty.com